

〈資料〉

健康づくりリーダー養成講座修了生の地元での
「まちの保健室」の企画の取り組み
—企画の実態と今後の支援—

岡 本 朋 子・藤 原 美智子・安 田 美彌子

Tomoko OKAMOTO, Michiko FUJIHARA, Miyako YASUDA :

Efforts of Graduates of the Local Health Leader Training Course to Plan a “Local Health Room” in Their Hometowns
—Actual Status of the Plan and Future Support—

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第84号 抜刷

2022年1月

〈資料〉

健康づくりリーダー養成講座修了生の地元での 「まちの保健室」の企画の取り組み —企画の実態と今後の支援—

岡本 朋子¹・藤原 美智子¹・安田 美彌子²

Tomoko OKAMOTO, Michiko FUJIHARA, Miyako YASUDA : Efforts of Graduates of the Local Health Leader
Training Course to Plan a "Local Health Room" in Their Hometowns
—Actual Status of the Plan and Future Support—

本研究は健康づくりリーダー養成講座修了生が、「まちの保健室」を継続して開催することを意図した地元での「まちの保健室」の企画の実態や今後の支援の方向性について明らかにすることを目的とした。調査結果からは、地域づくりや健康の維持・増進の企画の理由が多かった。今後の企画は、興味を持てる企画や開催の回数や場所についての回答があり、支援の方向性は、運営についてのマニュアル作成や実践力の維持向上のための研修会や定期的な開催が可能となるような小規模での開催に向けた支援の必要が示唆された。

キーワード：健康づくりリーダー養成講座修了生 「まちの保健室」 地元 企画

はじめに

A大学では、住民を対象にした「まちの保健室」を企画運営している。「まちの保健室」は住民が安心して健やかな生活を送れるよう、気軽に利用できる自分の健康を振り返り、相談できる場(小さな拠点)となることを目的として、開催されている。また、2015年度からは、地域の健康づくりリーダーおよびボランティア組織を担う人材育成の目的で、健康づくりリーダー養成講座「まめんなかえ師範塾」を開催している。修了生(以下「まめんなかえ師範」)は2020年10月時点で、120名を超えており、地域での「まちの保健室」開催時の運営スタッフとして、「まちの保健室」を支えている。さらに、2016年

から、A大学において「まめんなかえ師範」に対する継続活動支援策として、自主的かつ効率的に活動の場を選択できることを目的とした「教育サポーター人材バンク」¹⁾が立ち上げられ、「まめんなかえ師範」は自由意思での登録をしている。「教育サポーター人材バンク」では、ボランティアの参加の呼びかけのほか、登録者に対する情報発信・情報共有などが行われている。

「まちの保健室」は開催場所や開催方法の違いにより、A大学で毎月1回開催する拠点型、公民館(2021年4月からコミュニティセンターに改名)で開催する準拠点型、地域からの要望やイベントで開催する出前・イベント型の3種類に分けられている。

「まめんなかえ師範」による「まちの保健室」活動への参加体制としては、「教育サポーター人材バンク」からメールにて情報発信され、募集がかかる。そして、都合のつく「まめんなかえ師範」が申し込みをして、「教育サポーター人材バンク」で人数調

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

2 前鳥取看護大学大学院 看護学研究科看護学専攻

整を行い、当日の運営に携わる体制をとっている。

「まめんなかえ師範」が生活する地元において、地域住民の健康づくりにつながる「まちの保健室」を企画していくことは、本来、地域の健康づくりリーダーとして重要な役割と考えられる。「まめんなかえ師範」は地域の健康づくりのソーシャル・キャピタルとして期待されている。近藤²⁾によれば、アメリカの政治学者、ロバート・パットナムは、ソーシャル・キャピタルとは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴であると定義している。このことから、地域住民である「まめんなかえ師範」が、地域のことを良く知っていること、そして、ネットワークがあるという強みを生かして、地元における「まちの保健室」活動を行っていくことは、地域の健康増進に繋がり、活動も定着しやすいと考えられる。

「まちの保健室」の場が、誰でも行きやすい身近な存在、つまり「小さな拠点」になることが理想的な形であり、そういった地域単位の健康づくりには、「まめんなかえ師範」のような地域住民の存在が大きいと考える。「まめんなかえ師範」が中心となり、「まめんなかえ師範」の地元での「まちの保健室」を企画し、活躍している地域があるが、まだ一部に限られている状況であり、企画状況やその結果について現在まで分析できていない。

そこで、本研究は、「まめんなかえ師範」における地元での「まちの保健室」の企画の実態や今後の支援の方向性について明らかにすることを目的とする。

その結果により継続可能なものになる体制づくりや地域に根差した「まちの保健室」開催についての検討を行うことに寄与すると考える。

用語の定義

地元：「まめんなかえ師範」が居住している公民館
区域

企画：日程・場所・測定項目・ミニ講話のテーマなどを決めることにかかわること

1. 研究方法

(1) 研究デザイン：質的記述的研究

(2) 調査期間：2020年2月14日～2月25日

(3) 研究対象者

健康づくりリーダー養成講座「まめんなかえ師範塾」を修了し1年以上経過した第1期～第9期生94名のうち、教育サポーター人材バンクに登録していて、連絡が可能な63名に教育サポーター人材バンクから本調査の依頼をおこなった。その結果35名から回答があり、そのうちの33名から研究協力の同意が得られた。

(4) データ収集方法

独自に作成した無記名の自記式質問紙調査とした。教育サポーター人材バンクの担当者が研究対象者の意思を確認した後、同意の得られた33名に質問紙を郵送した。回収数33部（回収率100%）。質問紙の内容は、対象者の属性（居住地域、年齢）、2019年の1年間の活動頻度とその理由、地元で「まちの保健室」の企画に取り組んだ経験の有無の4項目と企画の経験がある回答者に対しての自由記述の質問4項目である。自由記述の質問内容は①企画したいと思った理由について②開催してどのようなことを感じたか③今後どのような企画をしていきたいか④そのためにはどのような支援（A大学や行政などから）があるとよいと思うかである。

(5) 分析方法

選択項目は単純集計し、自由記述は質的帰納的に分析を行った。意味内容の類似したものを集めて分類し、その分類内容を表現している名称を付けてサブカテゴリー化、カテゴリー化した。データの信頼性・妥当性を確保するため、分析は質的研究に精通するA大学の教員のスーパーバイズを受けながら検討を繰り返した。

(6) 倫理的配慮

研究対象者へは、研究の目的、方法、参加は自由意思であること、同意の撤回ができること、断っても不利益は受けないことを文書で説明した。結果の公表、匿名性の確保、データの厳重な保管、研究以外の目的での不使用、研究終了後5年間の保存期間が経過した後は、データは復元できないように破棄することも文書で説明した。本研究は、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号2019-9）を受けて実施した。

2. 結果

(1) 対象の属性と活動状況および地元で「まちの保健室」の企画経験の有無

1) 対象者の属性

年齢：50代は7名(21.2%)、60代19名(57.6%)、70代以上7名(21.2%)であった。

2) 活動状況

1年間の「まちの保健室」参加の活動頻度について、毎月1回以上は9名(27.3%)、半月に2~3回は7名(21.2%)、1年に1~2回は8名(24.2%)、全く活動

していないは9名(27.3%)であった。毎月1回以上参加する理由として「退職後自分が役立つ場所があることに喜びを見出した」「自身の健康を含め皆さんに健康に関心をもって楽しい人生を送られるお手伝いになればと思う」「定期的に参加しないと学習した内容を忘れてしまいそう」「活動が楽しみになっている」「参加者の笑顔から元気になれる」などがあつた。全く活動していない理由として、「仕事をしていて、他に地区のボランティア活動などに出ることがあり、時間や体調のバランスを考え活動に至らない」「地区の役員を数多く受けている」「日程が合わない」「孫の子守」「参加者が多く担当にならなかった」などがあつた。

3) 地元での「まちの保健室」の企画経験の有無

「あり」の回答は16名(48.5%)、「なし」の回答は17名(51.5%)であった。

(2) 地元で「まちの保健室」の企画経験のある16名の回答について

1) 企画した理由(表1)

22コードが抽出され、7サブカテゴリと4カテゴリに分類された。以下《 》はカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリ、「 」はコードとした。

表1 地元で「まちの保健室」を企画した理由

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
地域づくり	ふれあいやつながりができる	・地区住民の方のふれあいの場所になってほしい ・住民の皆さんのつながりがつくれる ・地域の人たちとの交流を重ねることができる ・顔見知りの方が多い ・サロンのようにリラックスできる場所だから気軽に出かけやすい ・地域の方々が気軽に集える
	安心安全な地区にしたい	・地区民の安心安全な地区にしたい ・市民の福祉のためになる ・地域住民も安心できる
	遠いと参加しにくい	・遠くの地区公民館は、足の悪い人や出かけるのが億劫な人にとって参加しにくい場所である
健康の維持・増進	地区住民に健康に関心をもってほしい	・地区住民の方にもっと、自身の健康について関心を持っていただきたい ・まちの方々が健康にどれだけ関心があるか ・地域の方に健康に関心をもっていただきたい ・サロンを毎月2回開催しているので、皆さんに健康のことを考えていただく ・地域の方に、少しでも自分の健康に関心をもってもらいたい
	健康維持・健康チェックができる	・地区民の健康を保ちたい ・地域の方々が気軽に集い健康チェックができる ・地域の健康力を高めて地域を元気にしたい
地域における「まちの保健室」の周知	「まちの保健室」を地域に知らせたい	・東部での「まちの保健室」の開催が少ないのもっと広めたい ・皆さんに看護大学の「まちの保健室」があり、出張していただけることを知っていただきたい
地域活動の基盤の存在	地盤があつた	・健康意識の高い人が集まり、定期的に取り組んだ地盤があつた ・集落を巻き込んで協力して頂けるから自治公民館で行うことはよい

《地域づくり》は、「地区住民の方のふれあいの場所になってほしい」「住民の皆さんのつながりがつくれる」という〈ふれあいやつながりができる〉、「地区民の安心安全な地区にしたい」「市民の福祉のためになる」という〈安心安全な地区にしたい〉、「遠くの地区公民館は、足の悪い人や出かけるのが億劫な人にとって参加しにくい場所である」という〈遠くと参加しにくい〉などの3サブカテゴリーであった。《健康の維持・増進》は、「地区住民の方にもっと、自身の健康について関心を持っていただきたい」「まちの方々が健康にどれだけ関心があるか」という〈地区住民に健康に関心をもってほしい〉、「地区民の健康を保ちたい」「地域の方々が気軽に集い健康チェックができる」などの〈健康維持・健康チェックがで

きる〉の2サブカテゴリーであった。《地域における「まちの保健室」の周知》は、「東部での『まちの保健室』の開催が少ないのもっと広めたい」などの〈「まちの保健室」を地域に知らせたい〉の1カテゴリー、《地域活動の基盤の存在》は、「健康意識の高い人が集まり、定期的に取り組んだ地盤があった」などの〈地盤があった〉の1サブカテゴリーであった。

2) 開催した感想 (表2)

28コードが抽出され9サブカテゴリーと4カテゴリーに分類された。《住民の反応での手ごたえ》は、「実際参加された方々は喜んでいて」「楽しく測定を受けたり身近なことを話したり、常に笑顔が絶えない会場になった」などの〈肯定的に開催をとらえ

表2 開催した感想

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
住民の反応での手ごたえ	肯定的に開催をとらえている	<ul style="list-style-type: none"> ・実際参加された方々は喜んでいて ・楽しく測定を受けたり身近なことを話したり、常に笑顔が絶えない会場になった ・真剣に取り組もうという姿勢が感じられた ・皆さんがとても期待して集まった ・再度開催の要望が多く聞かれた ・大変よかった
	健康づくりへの意識の向上	<ul style="list-style-type: none"> ・地域への健康づくりの意識向上につながった ・自分の体を知ることで、住民の意識を高められてうれしく感じた ・定期的な健康への取り組みに成果があった ・年配者は地区や自分のため、健康寿命を長く保たなければならない
	特定の測定項目で参加者の高い関心や参加度	<ul style="list-style-type: none"> ・血管年齢や骨密度に関心が高かった ・肌年齢を取り入れたら参加者が多かった
「まちの保健室」の意義	健康への関心の高さ	<ul style="list-style-type: none"> ・健康に関心を持っておられる方が多いことに気が付いた ・世代に関係なく健康に関心を持っている人は多い ・地区住民が健康であることを再認識した ・測定やミニ講話もきちんと聞かれていて、真剣に取り組もうという姿勢が感じられた ・健康に関心のある人の集まりになる
	健康管理の場	<ul style="list-style-type: none"> ・病院に行かなくても健康管理ができる ・内容的に血圧、体脂肪などは健康を維持していくうえで大切である
	つながり	<ul style="list-style-type: none"> ・気軽に参加できて、来た人と話ができる ・相談ができる楽しい場所である ・学生さん若い方とのかかわりに関心が高かった
現状からの課題	少ない参加者	<ul style="list-style-type: none"> ・参加される方は少人数だった ・男性の方が少なかった ・若い方の参加も少なかった ・自分の健康への関心度が低いのか来室者が少ないように感じた
	認知度が低い	<ul style="list-style-type: none"> ・初めてで、内容を知らないので進んで参加する方が少なかった
活動への誇り	誇りが持てる	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が活動できることや住人に活動を知ってもらったことでより一層活動に誇りが持てた

ている)、「地域への健康づくりの意識向上につながった」「自分の体を知ることで、住民の意識を高められてうれしく感じた」などの〈健康づくりへの意識の向上〉、「血管年齢や骨密度に関心が高かった」などの〈特定の測定項目で参加者の高い関心や参加度〉の3サブカテゴリーであった。《「まちの保健室」の意義》は、「健康に関心を持っておられる方が多いことに気が付いた」「世代に関係なく健康に関心を持っている人は多い」などの〈健康への関心の高さ〉、「病院に行かなくても健康管理ができる」などの〈健康管理の場〉、「気軽に参加できて、来た人と話ができる」などの〈つながり〉の3サブカテゴリーであった。《現状からの課題》は、「参加される方は少人数だった」「男性の方が少なかった」などの〈少ない参加者〉、「初めてで、内容を知らないので進んで参加する方が少なかった」の〈認知度が低い〉の2サブカテゴリーであった。《活動への誇り》は、「自分が活動できることや住人に活動を知ってもらったことでより一層活動に誇りが持てた」という〈誇り

が持てる〉の1サブカテゴリーであった。

3) 今後どのような企画をしたいか (表 3)

15 コードが抽出され、6 サブカテゴリーと3 カテゴリーに分類された。《住民が興味を持てる企画》は、「ミニ講話以外に人形劇などの面白い何かや昔の歌を歌うとよい」などの〈企画内容の工夫〉、「『まめんなかえ師範』」の個人の活動等と共同で『まちの保健室』を企画したい」「いきいきサロンと共に開催できたらよい」の〈個人活動や他事業との共同開催〉、「小中学生も参加できる方法を考えたら良い」「参加される方が少しでも増えるよう呼びかけたい」の〈参加者の拡大〉の3サブカテゴリーであった。

《開催の回数と場所》は、「定期的に取り組むことが大切だ」などの〈定期的な開催〉、「開催できる公民館を増やしていきたい」という〈開催場所の増加〉の2サブカテゴリーであった。《運営方法の理解》は、「継続的な参加のために、必要な運動やその他の取り組みや知識について教えてほしい」などの〈運営方法の理解〉の1サブカテゴリーであった。

表 3 今後どのような企画をしたいか

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
住民が興味を持てる企画	企画内容の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ミニ講話以外に人形劇などの面白い何かや昔の歌を歌うとよい ・待っている間簡単な体操を組み入れたら楽しくなる ・マンネリ化しないように測定内容の見直しをする ・簡単なストレッチや頭の体操等3~4種類加えると参加する意欲も生まれる
	個人活動や他事業との共同開催	<ul style="list-style-type: none"> ・「まめんなかえ師範」の個人活動等と共同で「まちの保健室」を企画したい ・いきいきサロンと共に開催できたらよい
	参加者の拡大	<ul style="list-style-type: none"> ・小中学生も参加できる方法を考えたら良い ・参加される方が少しでも増えるよう呼びかけたい
開催の回数と場所	定期的な開催	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に取り組むことが大切だ ・定期的な開催をする ・集落単位で定期的開催する ・毎年開催して欲しい
	開催場所の増加	<ul style="list-style-type: none"> ・開催できる公民館を増やしていきたい
運営方法の理解	運営方法の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的な参加のために、必要な運動やその他の取り組みや知識について教えてほしい ・最初はリーダーについて協力する

4) 企画にどのような支援があるとよいか (表 4)

14 コードが抽出され7サブカテゴリー、4カテゴリーに分類された。《様々な専門家の支援》は、「その道の達人の紹介や無料での派遣をしてほしい」「レクリエーションや運動の専門家の支援がときどき欲しい」などの〈専門家の派遣〉、「年に1~2回の『まちの保健室』を開催し、取り組んでいることの成果を分析してほしい」などの〈成果の分析〉の2サブカテゴリーであった。《行政や大学などとの協力体制》は、「大学側から行政に働きかけがあると私たちも動きやすくなる」「広報等に対する支援」の〈行政の理解と協力〉、「大きな組織の支援とフォローアップ体制」などの〈フォローアップ体制〉の2サブカテゴリーであった。《継続教育》は、「『まめんなかえ師範』による企画運営のマニュアル」の〈企画運営マニュアル作成〉、「年に1回でも知識や実践が学べる機会があればよい」の〈学習の機会〉の2サブカテゴリーであった。《定期開催に向けた体制作り》は、「定期的で開催しやすいように、小規模で、『まめんなかえ師範』による開催を可能にしてほしい」「でき

れば継続して開催できるようにしてほしい」の〈開催方法の工夫〉の1サブカテゴリーであった。

3. 考察

(1) 活動状況について

活動状況について、回答のあった33名中60歳代以上が約8割であったことから、おおよそ第一線で社会活動からいったん退き、その後ボランティア活動を始めたと考えられる。毎月1回以上の参加者の回答では、役立っているという喜びや活動そのものへの楽しみなどがあり、生きがいにつながる活動となっている。また参加しないと忘れるという回答から意欲的に取り組もうとしている姿勢がわかった。

活動頻度の「全く活動していない」回答をみると、仕事や地域のボランティア活動や家庭での役割などで日程や時間が合わないことなどがあった。このことから、他の活動との重なりで時間や日程の調整や個人的な事情により参加が困難な状況がわかった。

「まめんなかえ師範」が地元で「まちの保健室」

表4 企画にどのような支援があるとよいか

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
様々な専門家の支援	専門家の派遣	<ul style="list-style-type: none"> ・その道の達人の紹介や無料での派遣をしてほしい ・レクリエーションや運動の専門家の支援がときどき欲しい ・スタッフの派遣と測定器具の貸し出し ・保健師の派遣交流
	成果の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・年に1~2回の「まちの保健室」を開催し、取り組んでいることの成果を分析してほしい ・大学には「まちの保健室」「まめんなかえ師範」のデータベース化と利用の促進をしてほしい
行政や大学などとの協力体制	行政の理解と協力	<ul style="list-style-type: none"> ・大学側から行政に働きかけがあると私たちも動きやすくなる ・広報等に対する支援
	フォローアップ体制	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな組織の支援とフォローアップ体制 ・組織間の連携力の利用と信頼関係
継続教育	企画運営マニュアル作成	<ul style="list-style-type: none"> ・「まめんなかえ師範」による企画運営のマニュアル
	学習の機会	<ul style="list-style-type: none"> ・年に1回でも知識や実践が学べる機会があればよい
定期開催に向けた体制作り	開催方法の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的で開催しやすいように、小規模で、「まめんなかえ師範」による開催を可能にしてほしい ・できれば継続して開催できるようにしてほしい

を開催した理由は、《地域づくり》が一番多く地区住民のふれあいやつながりをとおして安心して安全な地域を目指している。次に地区住民の健康の維持増進が多く、これはA大学の「まちの保健室」の目的の一つである健康づくりと一致していた。ほかには、さらに「まちの保健室」の存在を広く住民に知らせたいという理由や、開催にあたって地元で基盤があったという開催のしやすさなどの回答があり、「まちの保健室」の効果を期待しながら、地盤があるという取り組みやすさから開催していることがわかった。

開催した感想は、〈肯定的に開催をとらえている〉が最も多く、次に〈健康への関心の高さ〉だった。

開催に対して肯定的な回答が多く開催の意義や手ごたえを実感している半面、参加者が少ないという感想も見られた。とくに若い人や男性の参加者が少ないなどは、今後の課題として挙げられる。「まちの保健室」が参加者の健康増進の場や相談ができる楽しい場という感想があることから参加者を増やす方法として、まずは参加してみるきっかけを工夫することが考えられる。他に〈つながり〉があり企画した理由の〈ふれあいやつながりができる〉と同じ傾向であるとわかった。

(2) 今後の企画と活動への支援について

今後、どのような企画をしたいかについては、《住民が興味を持てる企画》として、様々な具体的な内容が挙げられていた。レクリエーションや簡単な体操、マンネリ化しないための測定内容の見直しなど従来の「まちの保健室」に新たな企画を提案しており、地域の人々の関心を高め、継続的な参加を促したいという意図がわかる。また、「まめんなかえ師範」が個々で行っている「ふれあい・いきいきサロン」との共同開催の回答があり、地域活動の経験を活かした企画への意欲の高さがわかった。このことから、地域で活動している組織・グループを活用したり、独居老人の多い地域では開催場所や規模を検討するなど、地域の特性を生かした企画を模索していると推察する。今後は、地元における「まめんなかえ師

範」の人的ネットワークという強みを生かした企画や活動が期待される。また、定期的な開催を望む回答があり、継続した開催とともに集落という小規模での開催が求められていることがわかった。

どのような企画をしたいかの問いではあったが、《運営方法を理解》が抽出された。これは、今後継続して開催していくために、運営の方法そのものの理解や、企画の具体的内容を知ることで、「まちの保健室」をしっかりと理解して、より有益な活動となること目指していると言える。そのため、「まめんなかえ師範」に対して運営に関する研修について検討の必要があると考える。

「まちの保健室」企画への支援について、《様々な専門家の支援》では、従来の「まちの保健室」を企画する場合は、回答にあったとおり保健師や運動などに関する専門家やスタッフの派遣と合わせて測定器具の貸し出しが必要となる。一方、「成果の分析」では、定期的で開催している「まちの保健室」の成果について専門家の分析を希望していることから、住民の健康の維持増進に向けて今後の取り組みの示唆を得たいと考えていることがわかった。さらに、《行政や大学との協力体制》では行政や大学の支援を求めている。これらの組織と協力関係を築き、連携をとることで、「まめんなかえ師範」の活動が広がり多様な企画を生み出すことができると考える。また、行政には広報活動を期待していた。これは参加者が少ないと回答にあったことから、広く周知する方法として行政による広報活動の支援を求めていると言える。《継続教育》では、「企画のマニュアル作成」があり、開催を考えている「まめんなかえ師範」が円滑に実施できるように、企画運営するにあたってのマニュアルの必要が示された。マニュアルのみならず継続して学ぶ機会の希望から、学ぶ機会があることで、知識や測定技術やコミュニケーションなどのスキルを維持し高めていきたい思いがあることがわかった。今後、継続して学べる機会や方法の検討が示唆された。《定期開催に向けた体制作り》では、継続して定期的で開催するには、開催の規模

を縮小して、「まめんなかえ師範」による開催を考
えており、これは、参加人数やスタッフ人数を縮小
して、自分たちの力での開催を模索していると言
える。ここからも「まめんなかえ師範」の意欲の高
さがうかがえる。地域の状況に合わせた「まちの保
健室」の柔軟な開催方法の検討や、自助の精神で地
元のリソースを活用して工夫しながら行えるような
体制づくりの必要性について示唆された。

4. まとめ

「まめんなかえ師範」の地元での「まちの保健室」
の企画の実態や今後の支援の方向性について以下の
ことが明らかになった。

(1) 活動している年代は60歳代以上が約8割
であった。

(2) 地元で「まちの保健室」を企画した理由は
《地域づくり》《健康の維持・増進》《地域における
「まちの保健室」の周知》《地域活動の基盤の存在》
に分けられ、開催することで、《住民の反応での手
ごたえ》《「まちの保健室」の意義》《現状からの課題》
《活動への誇り》を感じていた。

(3) 今後の企画は、《住民が興味をもてる企画》
《開催の回数と場所》《運営方法》が挙がり、求め
る支援では《様々な専門家の支援》《行政や大学な
どとの協力体制》《継続教育》《定期開催に向けた体
制作り》を求めている。

(4) 支援の方向性として、「まめんなかえ師範」
が活動しやすいようにマニュアル作成や「まちの保
健室」の運営や実践力の維持向上のための研修会
の開催、小規模での「まちの保健室」の開催に向けた
支援などが示された。

謝辞

今回、調査にご協力いただいた「まめんなかえ師
範」の皆様には深く感謝いたします。また、本調査は鳥
取看護大学教育研究プロジェクトの助成を受けて実施
しました。

引用・参考文献

- 1) 中川康江『「まめんなかえ師範塾」実施報告』
鳥取看護大学「平成30年度『地域貢献活動』報
告書」(2019), pp. 41-46.
- 2) 近藤克則『ケアと健康：社会・地域・病い』（講
座ケア新たな人間—社会像に向けて4）、ミネル
ヴァ書房、2016、p. 119.
- 3) 近田敬子「鳥取看護大学における地域貢献委の
振り返りと今後の展望、鳥取看護大学『平成30
年度「地域貢献活動」報告書』 地域との関係を
紡いだ4年間の総括と未来図(2019)、巻頭言。
- 4) 中川康江「地域に根ざす人材育成モデルの構築
と検証—健康づくりリーダー養成講座『まめんな
かえ師範』の実践を通して—」、『グローバル（鳥
取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター年
報）』第1号(2018)、pp. 40-43.
- 5) 中川康江「地域の健康づくりリーダー育成業に
おける継続的支援の実際」、『グローバル（鳥取
看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター年報）』
第2号(2019)、pp. 63-66.
- 6) 中川康江、田中響、土居裕美子、近田敬子「地
域の健康づくりリーダー養成による大学・地域連
携強化の取り組み」、『鳥取看護大学・鳥取短期大
学研究紀要』第76号(2017)、pp. 57-60.
- 7) 藤井麻帆、田中響、美船智世、近田敬子『「ま
ちの保健室」の活動地域拡大に向けての方策
～コミュニティ特性に応じた連携・協働～』、『鳥
取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』第75号
(2017)、pp. 35-43.
- 8) 村山洋史他「健康推進活動における活動満足感、
活動負担感の尺度開発」、『日本公衆衛生学会誌』、
53(12)(2006)、pp. 875-883.
- 9) 藤井志穂里、滝本あすか他「健康推進員が地域
で健康づくり活動を継続する要因に関する研究」、
『保健師ジャーナル』68(5)(2012)、pp. 416-
422.